整備波及効果など学ぶ

留萌商議所が洋上風力勉強会

【留萌】留萌商工会議所は11日、留萌産業会館で洋上風力発電に関する勉強会を開いた。INFLUX（本社・東京）の社員らが講師を担当した。洋上風力発電施設を整備する利点、地域への波及効果、資機材の搬入や保管などを担う基地港湾に求められる条件について解説した。

市や留萌振興局の職員、市内に本社を置く建設コンサルタント業者などから85人が参加した。

洋上風力発電施設を整備する利点は、十河佑輔北海道プロジェクト開発部マネージャーが解説。「風車を造るための部品が2万点以上あり、製造業から建設業まで幅広い分野への経済波及効果が見込まれる」と説いた。

年間平均風速6㍍以上が事業を成功させる目安の一つとし、留萌沖は7・8㍍と風況がよく、拠点港となり得る留萌港があることから高い潜在能力があるとした。

基地港湾の説明は高原修司執行役員が担当した。基地港湾の条件として、延長230㍍、水深12㍍程度の岸壁、27・5－32㍍ほどの部材置き場、1平方㍍当たり35㌧の地耐力が岸壁前面で確保できることなどを指摘。「指定に当たっては2（海域）以上の利用者が必要」とも述べた。基地港湾を目指す新潟港を例に挙げ、新潟県村上市・胎内市沖、富山県東部沖が利用者として見込みがあることを伝えた。

留萌沿岸は世界三大波とうに数えられている。冬の風は猛烈で、2017年12月には記録的な暴風雪により留萌港の西防波堤灯台が海中に転落した。

こうした環境下でも点検やメンテナンスが必要となるが、高原執行役員は「洋上風力発電施設を整備する場合、陸上に監視所を設けるのでそこで状況を確認する。ドローンを活用した点検、メンテナンス船による対応を想定している」とした。

洋上風力発電整備がもたらす効果について耳を傾ける参加者